

## 養翠園・滴翠園の調査

本年度おこなった養翠園(和歌山市)、滴翠園(京都市)の調査は、ともに後年度に控える庭園改修にともない、実測図の作成を主眼としたものである。調査対象となる各庭園の面積、調査回数および日数は、養翠園が約27,000㎡(うち園池部分が約9,000㎡)、計6回、延べ26日間、滴翠園が約4,300㎡(うち園池部分が約900㎡)、計3回、延べ15日間である。調査にともない、養翠園では1/100、滴翠園では1/40で野帳を作成し、それぞれ1/200、1/50の清絵図と1/400、1/100の編集図(図1、図2)を作成した。

**養翠園** 一庭園の概要と保存整備— 養翠園は、文政年間(1818~30)に紀州徳川家第十代藩主<sup>はるとも</sup>治宝が和歌山藩士山本理左衛門の下屋敷を改修し、西浜御殿の別荘「水軒御用地」の庭園として造営したのを始まりとしている。治宝の死後、「水軒御用地」は家老三浦家に下げわたされるが、明治21年に徳川家が買い戻し、これを昭和8年、藤井家に売却、昭和23年の農地買収令によって、現在は庭園の部分のみが残っている。藤井家ではこの養翠園の保存に努め、同29年より公開のため飛び石を新たに施すなどして改修・整備を手掛けるとともに、「養翠園保存協会」を設立し、養翠園は同33年に和歌山県指定文化財「名勝 紀藩水軒御用地」の指定を受けた。同36年には第二室戸台風来襲の折、庭園内浸水や多くの倒木などによって多大な被害を蒙ったが、よく復旧に努め、同45年に保存事業経営の安定化のために「株式会社養翠園」を設立した。平成元年には国指定名勝「養翠園」となり、現在に至っている。

庭園は池泉回遊式を主要な骨格とするが、大浦湾に面する汐入式の園池、敷地面積の1/3を占めるこの園池を利用した舟遊式、天神山・章魚頭<sup>なまこづし</sup>姿山を背景とした借景式、中国西湖の風景を模した縮景式、露地など、種々の庭園様式が組み合わされている。

⌒字型の敷地は西辺と南辺を大浦湾に囲まれ、南側にある東西に長い園池を中心にひろがる。園池の北西には「養翠亭」(文政4年建築、平成3~6年改修)があり、園池南岸の狐山の石組や東方の中島、三ツ橋、天神山などを望む「御座の間」、あやめ池の正面に「御次御座敷」、

露地をともなう茶室「實際庵」などが付属している。

養翠園は海浜地にありながら、とくに海景を取り入れず、平坦な地形と大浦湾に接する部分を「松ヶ枝堤」で仕切って閉じた庭園空間を形成している。松ヶ枝堤は高さ約2m、幅約5mの土手の上に、胸高直径20~60cmの大分のクロマツを列植したもので、往時は湾岸に独特の風致をなしていたが、第二室戸台風以後、防潮のためのコンクリート堤防が堤の南側に接して設けられている。園内の植栽はこの「松ヶ枝堤」に代表されるように、大小のクロマツが大部分を占め、その他もウバメガシ、イヌマキ、マサキなど、耐潮性、防風性に富んだものを使用している。

園池は中島とこれに付属する三ツ橋、太鼓橋によってほぼ東西に二等分割される。庭石は紀州青石(緑泥片岩)を基調としており、護岸の石組はこれを石垣風に積むのを基本として一部を乱杭打ちとし、汀線は中島辺りを境に西側は自然風、東側は直線的な作りとなっている。紀州青石で作られた護岸は、築造以後の堆積などによって埋もれている部分があり、とくに南岸の狐山にみられる築山石組の本来の姿の解明には今後発掘調査等を含めた詳細な調査を必要とする。

今後、養翠園では「護岸の改修」「池の深渡」「御門長屋の修理」などの事業を順次予定している。庭園内部だけでなく、天神山の借景や松ヶ枝堤など周辺環境を含めた名勝の保全を進めるためには、緑地や港湾など、関係他部局と協力し、緑の基本計画や都市マスタープランのなかで総合的に位置づけた保全計画が必要である。

(平澤 毅/平城宮跡発掘調査部)

図1 養翠園平面図

**滴翠園 一洛中洛外図から読む築造年代— 西本願寺の東南隅にある滴翠園は、飛雲閣をめぐる庭園である。飛雲閣については、豊臣秀吉の京都邸第・聚楽第の遺構を移築したとの伝承が江戸時代からある。聚楽第遺構の移築説については、近年の解体修理の際の所見から否定的な見解が優勢であるが、なお、その真偽は決定的にはあきらかになっていない。飛雲閣が移築であるにせよ、新造にせよ、滴翠園の築造とは不可分の関係にある。滴翠園の築造およびその後の変遷については、文献史料と絵画資料を駆使した飛田範夫の論考(「西本願寺滴翠園の変遷」『史跡と美術』532号、1983年)がある。飛田は、洛中洛外図、なかでも《林家本》を手掛りに滴翠園の築造年代を考察しているが、《大阪市美術館本(田万家本)》に描かれた滴翠園の前身庭園および楼閣建物の存在をみおとしている。ここでは、二条城築造後の景観を描いた第二期洛中洛外図に属する《勝興寺本》と《大阪市美術館本》をとりあげて、築造年代を考察する。**

《勝興寺本》の景観年代は、再建のなった方広寺大仏殿が描かれ、同寺鐘樓が描かれていないことから、慶長16

図2 本願寺滴翠園平面図

図3 《勝興寺本》

図4 《大阪市美術館本》

年(1611)と元和元年(1615)の間と推定されている(日本屏風絵集成第11巻一洛中洛外、講談社、1978年)。左隻左下隅に描かれた西本願寺の東南隅をみると、堀にとりつく二層の建物と鐘樓が描かれるだけで、飛雲閣を思わせる建物はもちろん、池や庭園らしい木立なども全く描かれていない(図3)。一方、《大阪市美術館本》の景観年代は、内裏の形状と焼失以前の西本願寺の伽藍配置から、慶長19年(1614)と元和3年(1617)の間と推定されている(上掲書)。こちらには、鐘樓の南に平屋の建物が描かれ、さらにその南に園池が描かれている(図4)。園池は、堀川から導水したのであろう、東から直線的な水路が引き込まれる。北岸は、この水路北岸を延長したかたちで直線状にのびる。また、池の南岸には出島(または中島)とみられる突出部がある。この出島の東・北・西の護岸も直線状を呈し、池北岸からは木製反橋が架かる。さらに、この出島上には二層の楼閣建物が建つ。この出島西方の池南岸および西岸の護岸線は曲線を描き、池全体としては直線的な護岸と曲線的なそれとが併用されていることがわかる。《大阪市美術館本》に描かれたこの池を中心とする庭園が滴翠園の前身であり、楼閣建物が飛雲閣のものではないにしても、少なくともその前身建物であることはあきらかであろう。

以上の結果、飛雲閣の前身建物とそれをめぐる庭園が西本願寺東南隅のこの場所に築造されたのは、両図の景観年代に関する上記の推定が正しいとの前提に立てば、元和元年(1615)から同3年(1617)の間に絞られる。また、小堀遠州が直線的なデザインを庭園に導入しはじめたのがこの時期であり、この庭園には時代の先端を行くデザインが採用されていたといえる。さらに、反橋の存在は池での舟遊びがなされた可能性が高いことを示し、描かれた楼閣建物にも飛雲閣同様の舟入りの施設があった可能性を示唆している。

(小野健吉/平城宮跡発掘調査部)